

『聆濤閣集古帖』に描かれた 考古資料

関西大学博物館所蔵品を中心に

Archaeological Materials Depicted in the 'Reitokaku-Shukochō':
Focusing on the Collection of the Kansai University Museum

徳田誠志

TOKUDA Masashi

はじめに

① 将門城址出土の馬形埴輪

② 吉田家旧蔵の石製品

おわりに

【論文要旨】

本稿は『聆濤閣集古帖』に掲載されている考古資料のうち、関西大学博物館に現存している資料を取り上げて、吉田家3代にわたる古物収集過程の意義を考察した。

『聆濤閣集古帖』に掲載された馬形埴輪には出土地も所蔵者の情報もないが、『標有梅』（野里梅園著）には「将門城跡ヨリ出ル古代土馬」「兼葭堂蔵」との記述がある。このことから馬形埴輪は、常総市にある「向石毛城跡」近くにある「神子埋古墳群」から出土したものと判断した。その根拠は古墳群から出土した埴輪の胎土と、馬形埴輪の胎土の特徴が一致したことによる。すなわちこの埴輪は江戸時代に常陸国で出土したのち大坂に居住した木村兼葭堂の手に渡り、彼の死後吉田家にもたらされた。そして明治維新を迎え、埴輪は吉田家から兵庫県令神田孝平のもとに移る。神田は好古家でもあり、吉田家とは親しい交際が知られている。その後、神田のコレクションは、昭和初期に本山彦一（大阪毎日新聞社長）に譲渡され、戦後になって関西大学が一括して購入した。

次に『聆濤閣集古帖』にある琴柱形石製品は、木内石亭によって著された『雲根志』や、『集古図』（藤貞幹著）にも掲載されている。この資料は大和国長岳寺塔頭普賢院の住職が所蔵したとされるが、『聆濤閣集古帖』には底面の拓本が記録されており、吉田家の近いところに存在したことが窺える。明治維新後は好古家の柏木貨一郎が所蔵し、その後神田と本山の手を経て関西大学博物館に収蔵された。

本稿では『聆濤閣集古帖』に掲載された考古資料の、その後を明らかにしてきた。そして18世紀後半に登場してくる好古家が、彼らの知的好奇心によって古物を収集し考索を重ねてきた様子を見てきた。そしてこのことは単に古物が今日まで伝えられてきたというだけではなく、彼らの活動は現在の考古学研究においても有用であることを論じた。さらにこの知的好奇心による収集と研究があったからこそ、明治維新からそれほど時間を経ることなく文化財保護体制の確立や、現在の東京国立博物館の設立につながっていくものとして評価すべきことを論じた。

【キーワード】 関西大学博物館、木村兼葭堂、木内石亭、文化財保護体制、東京国立博物館